

人間としての生き方について深められる道徳の時間の在り方について —発達段階や言語活動に着目した授業実践から—

吉田 雅子

1. 主題設定の理由

道徳とは、「人間が人間としてより人間らしく生きようとする真実であり、生きる指針としての理念であり、無限に自己を克服していく働き」である。この人間としてよりよく生きていく力が道徳的実践力であり、学校教育における道徳教育の目標となる道徳的心情・道徳的判断力・道徳的実践意欲と態度を包括したものである。この力を育むため、道徳の時間では、資料を通して自分自身と向き合い、より人間らしい生き方について将来展望を図ることが重要であり、「自己との対話」が必要不可欠である。また同時に、他の児童・生徒との豊かで真剣な交流・対話を通じて、自分の感じ方や考え方を練り鍛え、より一層深化させることができると考える。

これまでの附属池田小学校を中心とした研究成果として、道徳における「自立」と「協同」の育成には、

- ①児童・生徒が自己の生き方、あるいは人間としての生き方や道徳的価値について考え、
- ②それを他の児童・生徒と交流することで相互理解・自己理解を深め、
- ③さらに自己の将来的な生き方・在り方を展望する、

という過程が意味を持つとの知見を挙げるができる。

こうした実践研究の蓄積を踏まえつつ、発達段階にも焦点を当て、自他の交流における言語活動を重視した道徳的実践力を育む道徳の授業を目指すことにした。

2. 実践について

(1) 小学校6年生と中学校3年生における実践より

①発達段階に応じた資料分析と発問

道徳の時間を通して、児童・生徒が相互理解を図るためには、自分だけでなく、「相手の気持ちを推測し、理解する能力」が必要となる。表1にあるように、「相手の気持ちを推測し、理解する力

(役割取得能力)は、児童・生徒の成長とともに広がりを見せる。それまで、自分自身の立場でしか物事を考えられなかったことが、年齢とともに、相手や第三者の立場から見た客観的な視点に立つことも可能となり、自己の狭くなりがちな考え方・捉え方を超えていくきっかけとすることができる。

表1 役割取得能力の発達段階 (セルマン 1995)

レベル0	自己中心的役割取得	自分と他者の視点を区別することが難しい。	3	
			4	
			5	
レベル1	主観的役割取得	自分と他者の視点を区別できるが、表情とは違う本当の気持ちを推測できない。	6	小学校低学年
			7	
レベル2	二人称相応的役割取得	自分と他者の視点を区別し、互いの視点から自分や他者の気持ちを推測できる。	8	小学校中学年
			9	
			10	
レベル3	三人称的役割取得	自分と他者以外の第三者の視点を取ることができる。	11	小学校高学年
			12	
			13	
			14	中学校
			15	多様な視点が存在する状況で

3年生までの全学年において実践し考察することで、発達段階の違いによる異同を追求することができると言える。

しかし、今回は、年齢が比較的近い小学校6年生と中学校3年生のみを対象に授業を行うことにした。それぞれの発達段階における対人的な視点の広がりや道徳的価値についての深まりをより明瞭に捉えるためには、同一資料を用いたり、発達段階に応じた発問の中に同じ視点からの発問を設定したり、対人的な視点の理解水準が把握できるような授業場面を考えるなどの工夫を行う必要があった。

そこで、今回、小学生でも中学生でも対応できる資料を用いることとした。資料として、小学校高学年の副読本でよく扱われている「銀の燭台」（「レ・ミゼラブル」より）を題材とし、実際の授業では、作者の意図を妨げないように配慮しつつ、一般向けに売られている文庫本から作った自作資料を用いた。

②内容項目と授業の展開について

この授業は、小学6年と中学3年共に、中学校の内容項目2－（2）「人間愛」に焦点を合わせて行った。内容項目2－（2）は、本来、小学校高学年では「思いやり」として扱われるが、この授業では、「小学6年生と中学生では、1つの価値についてどの程度認識が異なるか」を明確にすることがねらいであるため、中学生で扱われる「人間愛」に基準を合わせることにした。「思いやり」と「人間愛」の間には一定の距離があり、小学6年生がどの程度まで「人間愛」の精神を理解できるかの不明であったが、発達段階における価値の自覚の変容を明確にするため、この一定の距離を活用し、中学3年生を対象にした発問を用いることとした。ただし、実際の小学6年生の授業では、主要な発問を選び、言葉の言い回しを簡単にして用いた。

以下は、実際に行った指導の展開と発問である。

	小学6年	中学3年
導入	1. 登場人物を紹介する。	1. 登場人物を紹介する。
展開	2. 資料を読み、話し合う。 ○ジャン・バルジャンの置かれた状況とその理由について ○つけ足したワインにはどんな意味があるか。 ○ジャン・バルジャンは帽子を脱いで、どんな気持ちで月光の中の司教を見つめたか。	2. 資料を読み、話し合う。 ○ジャン・バルジャンが司教に出会うまでの流れを整理 ○どうして司教は夕食にワインをつけ足したのか。 ○月光の中の司教を、ジャン・バルジャンが帽子を脱いで見つめたのは、どうしてか。 ○司教の言う自身の「まちがった考え」とは、どのような中身か。

	<p>◎食器だけでなく、銀の燭台も一方的に渡したのはなぜだろう。</p> <p>○ジャン・バルジャンは司教が一方的に銀の燭台を渡し、一方的に清らかな魂を買ったと言っているが、どうしてジャン・バルジャンはこの後司教の一方的な約束を守ったのだろう。</p>	<p>◎食器をあげたと言うだけで済ませてよかったのに、さらに銀の燭台を渡したのはなぜだろう。</p> <p>○ジャン・バルジャンは司教が一方的に銀の燭台を渡し、一方的に清らかな魂を買ったと言っているが、どうしてジャン・バルジャンはこの後司教の一方的な約束を果たす（受ける）気持ちになったのだろう。</p> <p>○今日の感動を通じて、あなたがこれからの人生で大切にしたいと思うことは何か。</p>
終末	○今日の感想やわかったことをワークシートに書く。	○山口良治の言葉 「愛とは、相手を信じ、待ち、許すことである」を紹介する。

実際の授業で行った発問に対する生徒の反応や感想を整理し、生徒の意見の中でも特に多かったものを太字にすると次のようになる。

小学 6年	<p>司教…優しさ、人を信じた、立派（差別しない態度、励ます人、罪人にも平等） ジャンを変えたのですごい、ジャンは反省した 約束を守った理由… <u>司教さんに有名・偉くなったところを見せたくなったから約束を守った</u> 恩返しは、町の人にやさしくすること。それは司教さんの願いであり、幸せである。 ジャン・バルジャン…善人だ</p>
中学 3年	<p>銀の燭台… 善の心を持つ約束の品、間違いを暗に指摘、先を照らす象徴 優しさ←→感謝、心の広さ→将来を考えて、 許し→人を変える力+やり直すチャンス+尊敬、思いやり 期待、かばう、愛、願い、真心→正義に気付く、信じる→善人に変わること 司教…偉大、とっさの判断でも深く相手を考える、悪を包み込む温かさ</p>

小学6年と中学3年の意見を整理すると、小学6年に比べ、中学3年の方が、抽象的な言葉や客観的な表現が多く見られる。小学6年の記述には「司教さんに有名・偉くなったところを見せたくなくなったから約束を守った」といったものもあるが、共に、この資料に登場する司教やジャン・バルジャンに一方的に渡した「銀の燭台」から「優しさ」を感じていることがわかる。加えて、小学6年生では「優しさ」だけに留まっているが、中学3年生になると「やさしさ」に加え、「感謝」「心の広さ」「許し」「信じること」といった、まさに「人間愛」へとそのままつながる要素も感想に出ている。このことから、小学校高学年と中学生の年齢差がわずかにあっても、発達段階における役割取得能力や道徳的価値という点で、両者には大きな広がりがあることがわかる。

とは、生徒一人一人をより深く理解し、精神的にも大きく育てていくことにつながるという点において大きな意義があるだろう。

<参考資料>～中学3年生の授業の感想～

・司教さんは本当の愛とは何なのかをよく分かっているんだと思います。それが分かっている人は、本当の悲しみや苦しみを抱えている人たちを救えるんじゃないかと思います。

・ジャンはみじめだった。とてもみじめだということがあっても、食器を盗んだということは事実である。現代の世の中は甘くない。行った悪が許されることなどないのだ。その中で、ジャンは見逃されたその恩は、必ず返さないといけないのだ。

・私は、ジャン・バルジャンをこの状態で解放した側にも責任があると思います。お金もない、居場所もないのでは、改心しようとしてもしようがありません。司教は、普通の人であれば考えられないようなことをしていますが、こうするほかに、ジャン・バルジャンを今の状態から救う方法はなかったと思います。

・始め読んだ時には、司教の考えが全然理解できませんでした。いくら親切な人でも悪いことはだめと教えるべきだと思っていましたが、ジャン・バルジャンに期待の意味を込めて許したのだと分かりました。許されてそのままでなく変わらなくちゃ！という風に考えられるようになれないとその「愛」はムダになってしまうと思いました。

(2). 道徳における言語活動

言語は、知的活動の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤である。また、言語活動とは、自分が見聞きしたことや考えたことを、自分なりの言葉で表現・説明することで他者や自己自身との交流を図るものである。すなわち、道徳の時間における言語活動は、自分の言葉を探すところから始まると言える。なぜなら、他の児童・生徒から聞いた意見を整理したりまとめたりする時だけでなく、自分の意見を説明・発表する際にも、それを的確明瞭に表現する言葉が必要だからである。それゆえ、他の意見を手がかりに自分自身の考えを練り上げ、自分自身の考えを突き詰めていくといった活動の中でも、論理的な思考や表現を育むことができると言えるのではないだろうか。

実際には、「聞く」「話す」「語る」の3つの活動を基に、自分自身の考えを練り上げていくこととなる。道徳の時間では、それらの活動を軸に、児童・生徒それぞれが、ワークシートに自分の意見を書いたり、他児童・生徒の意見を聞いたりしつつ、自分の発達段階に合った方法で自己理解や相互理解を行っていく。

道徳の時間では、読み物資料を扱うことが多いが、授業の中で様々な工夫をすることで、児童・生徒の思考や表現を育むことができると考える。

①板書の工夫

生徒が自分の考えを練り上げ、突き詰めていくためには、単に、生徒同士を話し合わせるなどの

自分の考えを整理し、視聴覚教材と同様に、想像をふくらませるために有効な教材と考えられる。その点から、事前にある程度予想される答えを考えながら、どのような板書にするか（時系列にするのか、そうでないのか）やその構成を考える必要がある。例えば、写真1は研究会で授業を行った「銀の燭台」の板書写真である。資料に出てくる司教とジャン・バルジャンの関係、司教からジャン・バルジャンに渡される銀の食器や燭台のもつ意味を、絵や図、生徒の発表から出てきた言葉と共に図式化してある。

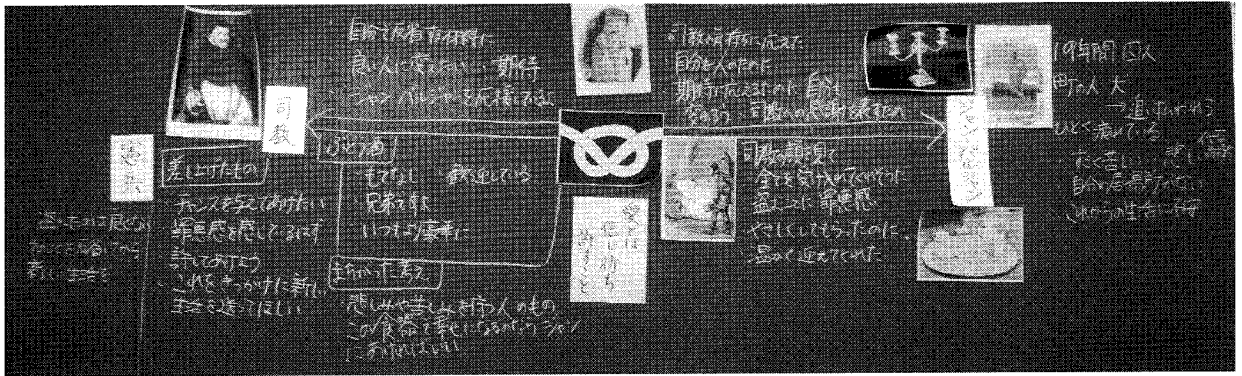


写真1 「銀の燭台」

写真2は、「手品師」の板書写真である。この授業では写真や絵を一切使用しなかったが、手品師に対する昔からの友人の思いと街で偶然出会った少年との約束の間で葛藤する手品師の思いを整理できるような板書にした。また、左端には展開後段で生徒に問うた「良心の声に耳を傾けない生き方を続けていくとどうなっていくか」を矢印とともに流れがわかるように整理した。

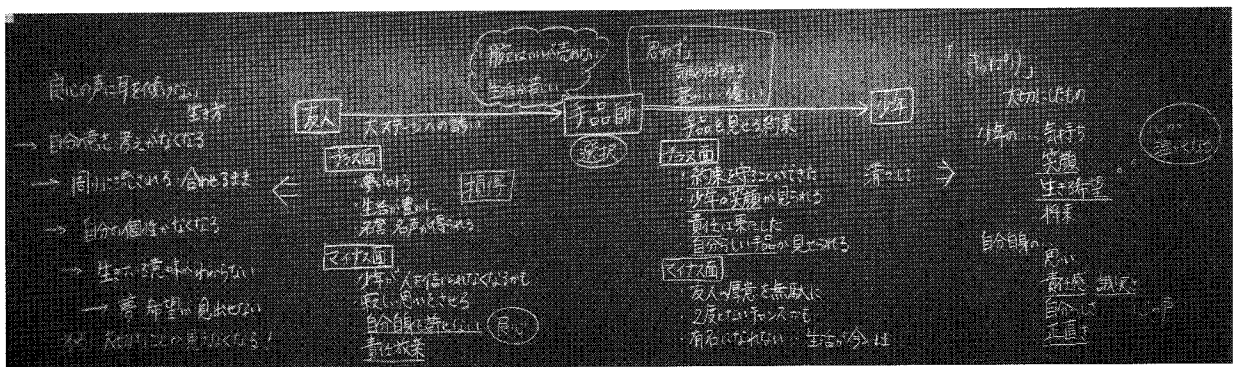
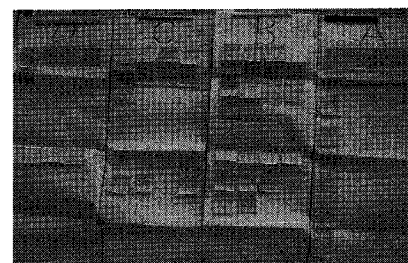


写真2 「手品師」

②付箋の利用

写真3は、「ドラえもん の落書き」を授業で行った時の模造紙である。国の天然記念物である鳥取砂丘の馬の背に大きな落書きがされていることが「観光地の景観を乱す」と問題になり、違反した場合には罰金が科されるという条例案が鳥取県で発表されたと



- A：罰金は10万円が適当である。 B：罰金は1万円でよい。
 C：口頭注意でよい。 D：口頭注意にも値しない。 E：その他

という5つの選択肢から自分の意見と合うものを選び、その理由を付箋に書かせた。そして、黒板に貼った模造紙上で整理した。それをクラス内での議論の前後で2回行い、クラスの意見がどのように変わったかがわかるようにした。

③ワークシート

3年生では、これまでとは異なったワークシートを用いることにした。昨年度までは、罫線の入ったものを使用していたが、今年度は、日付と資料の名前や振り返りをさせるアンケート以外は、罫線も入れずに真っ白なままで生徒に渡した。右は、実際に生徒が書いたワークシートであるが、同じ資料でも、生徒によってまとめ方が

●今日の議論をかかげて・・・

	たいへん	ふつう	まったく	
① 今日の議論は考えあがることがあったか	5	4	2	1
② 共有・整理したか	5	4	2	1
③ 自分自身を振り返ることができたか	5	4	2	1
④ 新たな発見があったか	5	4	2	1
⑤ 資料はよかったですか	5	4	2	1

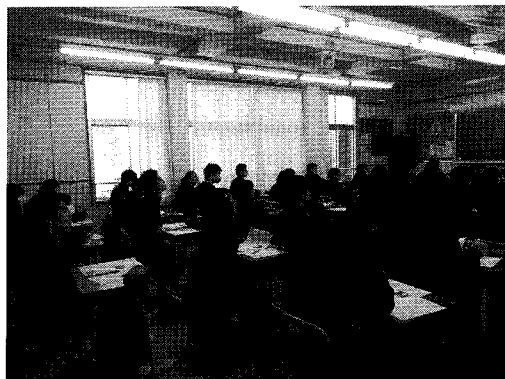
●今日の議論をかかげて・・・

	たいへん	ふつう	まったく	
① 今日の議論は考えあがることがあったか	5	4	2	1
② 共有・整理したか	5	4	2	1
③ 自分自身を振り返ることができたか	5	4	2	1
④ 新たな発見があったか	5	4	2	1
⑤ 資料はよかったですか	5	4	2	1

異なっていることがよくわかる。このようなワークシートの使用により、生徒一人一人が他生徒の意見も交えつつ、自分の意見を自分の方法でまとめ、自分の考えを深めていく手助けとなったと考えられる。

④音声・動画の利用

読み物資料を中心に進めると、つい画一的な授業になってしまいそうであるが、導入や展開で音声や動画を用いることで、生徒が、資料により興味を持ったり、その時間に捉えたい価値についてより深く考えたり、という手助けとなる。



今年度、3年生では、「旅する言葉」(2012年 JFN (ジャパン・エフエム・ネットワーク) ヒューマンコンシャスラジオ CM) や歌「風に立つライオン」(さだまさし)を導入に用いたり、屋久島と縄文杉をテーマにしたテレビ番組の録画や YouTube



からもってきた「たったひとつのたからもの」(明治安田生命 CM) や「強い子」といった動画を見せた。特に「たったひとつのたからもの」と「強い子」の動画には非常に強いメッセージが込められており、これらを見た生徒たちは、学校教育・道徳教育においても大きなテーマである「生命尊重」について深く考えたよ

3. まとめ

(1) 今年度の成果

今年度の学校評価アンケートの結果によると、「道徳の時間に人としての生き方について考えることができた」と感じている生徒が3学年合わせて80%以上存在していることがわかっている。これは、一昨年度、昨年度に比べて、ポイントが大きく飛躍している。普段から担任の先生が努力しておられるクラス経営の成果であろう。

私自身、道徳の時間とは、生徒が「どのような大人になりたいか」「生きていく上でどのようなことを大切にしていきたいか」を考える時間であり、教師として生徒たちに将来への展望や希望を与えていけるものになりたいと考えている。

だからこそ、一回限りの道徳授業ではなく、関連性のある道徳授業にしたい。

中学校では、24の内容項目を基に、計画的に道徳教育を進めるわけだが、1年間、あるいは、入学してから卒業するまでの3年間で、どのようなことを考えさせたいかという見通しを立てて進めることで、「行き当たりばったりの道徳授業」ではなく、「毎時間につながるある道徳授業」を進めることができるのではないだろうか。

そのような中で、私たち教師が発達段階や授業での工夫として言語活動について意識すれば、生徒にとって道徳の時間がより深く自覚できる時間になると言えるだろう。

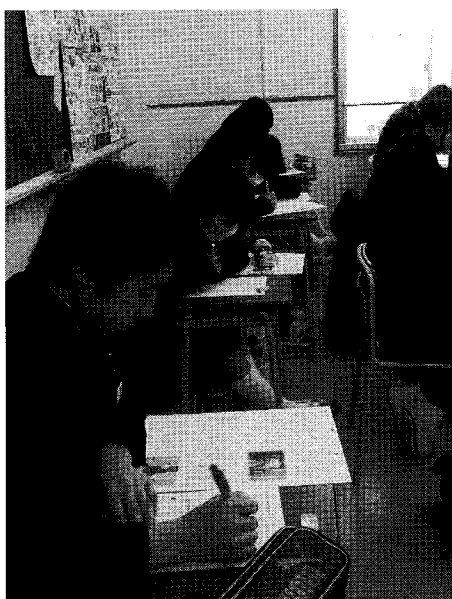
(2) 課題と展望

このように振り返ってみると、道徳の時間が「人間としての生き方」について深められるという目標に近づいているようではあるが、実際にはまだまだ課題は残されている。資料については、事前に綿密な年間計画を作成することが重要であり、副読本にある読み物資料だけでなく、生徒の心を耕し、将来への希望を与える様な珠玉の資料を教師自身が見つけてくる必要がある。同時に、音声や動画などの読み物資料以外のものに焦点を当てすぎてしまい、本来のねらいからずれてしまわないかといった懸念もある。

しかし、教師が内容項目について深く理解していれば、それぞれの項目について、各学年でどの

65 期生 (3年生) 道徳年間指導計画 (資料)

	内容項目	資料名	学校(学年)行事	
5/11	2(5)謙虚・寛容	「しあわせ」	校内大会	
5/18	2(1)礼儀	「1枚のほびき」		
6/1	4(1)規則	「元さんと2週の手紙」		
6/8	2(3)友情	「望まざる地」	社会参加実習	
6/22	4(5)寛容	ふんぴんばかり		
7/6	1(1)楽しい生活習慣	たまにはメールが来なくてもいいかも?		
8/31	1(2)強い意志	イチロー選手の当分の前		
9/7	3(2)自然への畏怖	樹齢7000年の杉		
9/14	4(7)愛校心	ボロ学校	先輩の授業	
9/21	2(2)人間愛			実習生授業
9/28	4(2)公徳心	缶コーヒー		
10/12	3(3)人間の気高さ	カーテンの向こう	体育大会	
10/26	2(4)男女の友情	あいつの進路選択		
11/2	4(4)集団の中の役割	監督がくれたメダル	文化祭	
11/9	4(6)家族愛	一冊のノート		
11/16-17	2(2)人間愛	銀のしよく台(研究会授業)		
11/30	4(10)世界平和	海と空 一冊野の人々 (エルトゥール著)		
1/11	2(5)郷土愛	土曜日の朝に		
1/18	4(3)郷土愛	よろこぼ「やねせん」へ		
1/25	1(3)読書	手紙箱		
2/1	1(4)理想の実現	旗に立つライオン		
2/8	3(3)人間の気高さ	良心とのたたかい		
2/15	4(9)伝統文化	「情緒」と「形」の魂、日本		
2/21	1(5)自己の向上	百戦の杉	送別会	
2/22	4(3)正義・公平	五井先生と太郎		
3/1	3(1)生命尊重	たった一つのたからもの	卒業式	



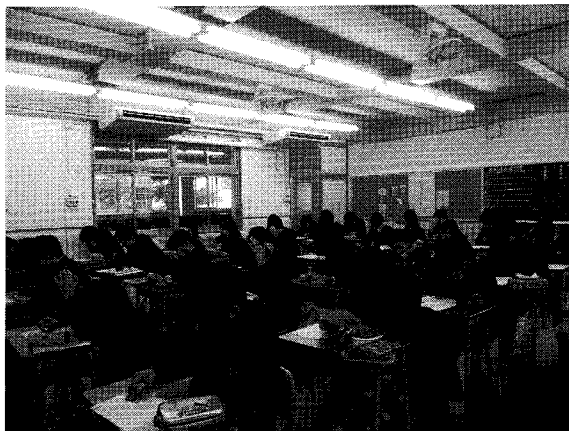
のかを考えておく必要がある。

また、中学1年と3年の1クラスずつを半分ずつ組み合わせて授業を行うなど、普段、教科ではできないようなクラス・年齢差を上手く利用して授業を行うことも、道徳の授業だからこそできる試みであろう。

今回提示した板書の内容や構成は、まだまだ技術的にも満足できるものではないが、毎回板書写真を撮り、記録として残しておくことで、その授業の中だけでなく、時が経つにつれ、生徒たちがどのような考えをもち、自分の生き方を深めてきたかについてもわかるのではないかと考えている。

人は日々、「生きる意味」を探しながら生きている。大人も子供も同じで、答えは簡単には見つからない。だからこそ、道徳の時間についても、日々、生徒の発達段階を理解しながら、人間としての生き方について深められる道徳の時間の在り方について、さらに追求していけるものにしていきたい。

最後に、今年度の3年生が義務教育最後の道徳「たったひとつのたからもの」を受けて、『命・生きる・人の幸せ』とは何かを考え、書いてくれた感想をいくつか紹介して終わりたい。



～「たったひとつのたからもの」より～

・「幸せ」というものが自分の願望が叶った時に感じるものだと今まで思っていたことにはずかしくなった。ただ、楽しいことだけが幸せじゃない。今を生きることも大きな幸せだと思えるようになった。

・「命」は生きること、「生きること」は幸せを探すこと、「幸せ」なことは「命」があること。人間の存在する意味は誰かを幸せにすること。その幸せを受けた人がまた誰かに幸せを伝えるために人が生きられるものだと思った。なにかをしなくても自分が生きているだけで人を幸せにできると知った。

・最近、「幸せとは何やろう？」と考える時間がたくさんある。「幸せ」について人それぞれの解釈があるけど、重くて深い。幸せにするかは自分次第であるというのは感じた。なので、人生を胸張れるものとするのも自分次第。

・生きる・命・幸せというものは、僕が今、それを満たせているからこそ、その大切さに気が付いていないと思った。そして、人間には、生きるという義務があり、さらに人間には他者の命を奪う権利はない。

参考文献

1) 『道徳教育の構造』(村上敏治著、明治図書、1973年)

2) 『中学校学習指導要領解説 道徳編』、『小学校学習指導要領解説 道徳編』(文部科学省、平成20年)